

第4回世界宗教者平和会議

ナイロビ宣言

1984

8月31日ケニア共和国・ナイロビ

世界宗教者平和会議に属する我々は、1984年、ナイロビにおいて第四回世界会議を開催した。世界の諸宗教—仏教、キリスト教、儒教、ヒンズー教、ジャイナ教、イスラム教、神道、シーク教、ゾロアスター教、北米の土着宗教その他—を網羅するおよそ六百人の人々が六十か国から参集した。さまざまな文化や伝統を背後にもちながら我々は緊急な共通の関心事たる「人間の尊厳と世界平和を求めて—宗教の協力と実践」を主題として集まった。我々は人間の尊厳と世界平和というこの目標に向かってともに取り組む。この二者は不可分に結びついており、従って一つのものとして追求されなければならない。

今回に先立つ1970年の京都会議、1974年のルーベン会議、1979年のプリンストン会議は、宗教協力の精神にかたく結ばれつつ平和を探求するという世界宗教者平和会議の成長と実績の里程碑であった。1984年のナイロビ会議において、いまや我々は重大な転機に立たしめられている。

前回以降のここ五年間において、人間の尊厳の向上、世界平和をめざす運動の進展に、何ら見るべきものがなかった。核軍備競争は、その驚くべき出費、その応酬、その計り知れぬ危険において増大の一途をたどっているが、貧困、飢餓、失業、無学を克服しようとする歴大な人間的欲求の充足は、あまりにも無視されてきた。社会における軍事化の進展、武器貿易、暴力行使、宗教的イデオロギー的不寛容、人権侵害等は、いぜんとして留まることを知らない。大衆の犠牲において少数者の特権を存続させる経済的政治的抑圧の体制は、いまなお牢固としている。

とはいうものの、我々を力づけてくれるのは、現下の世界状況にまつわる危険と損失に対する自覚が広がり、多くの人々がこれに気付きはじめていることであり、またいたるところ断乎として変革を求める人々の草の根運動が、全世界的に育ちつつあることである。今こそ平和を作りだすための新たな戦略と優先的対策を模索し、我々の責務に対する新たな献身を誓うべきときである。

我々は各自の宗教的伝統に根ざしながら、未来への展望と実践において互いに固く結ばれてナイロビに参集した。我々は宗教があまりにもしばしば対立抗争の分野で悪用され、分裂や分極化を助長してきたという痛ましい事実を認識する。宗教者はあまりにもしばしば、現代の最も重要な倫理的・道徳的問題に対して率先語りかけることをせず、またさらに重大なことには、変革への実際的措置を取らなかった。ともに集うことにおいて、我々は自己批判をおろそかにせず、また微妙な問題に関する極めて困難な議論を避けることをしなかった。ともあれ、我々の述べるところは、希望の表明である。

このナイロビ会議は我々に変革をもたらした。百人を超える青年代表の新たな参加によって、ともに手を携えて平和のための具体的な宗教協力プロジェクトを推進しようとする新たな世代の活力と視野が我々に与えられた。150人を越える婦人の強力かつ精力的な貢献によって、家庭生活のみならず、宗教団体および社会的政治的組織における指導力の発揮に関しても、婦人が対等な協力者として不可欠であることが歴然と示された。出席者の過半数は、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカからの参加者であって、この人たちは平和のための働きには、全地球的な結びつきと協力が大切であることを、より深くWCRPに理解させてくれた。

我々の奮励努力によって、我々は信頼を築き上げることができた。我々は礼拝や瞑想をともにした。我々は、文化や宗教の相違が、相互を脅かすどころか、得難い宝であることをあらためて発見した。我々の多様性は力の源泉である。世界共同体は可能であることを我々は体験を通して証しする。伝統の多様性を踏まえつつ我々は信仰と希望において結ばれ、人間の尊厳と世界平和をともに追い求めることにおいて一致した。

軍縮は解放を意味する。それはひとり、大量に蓄えられた使用寸前にある兵器からの解放を意味するのみならず、死の道具に取り憑かれていることから生ずる永続的恐怖と不安からの解放をも意味する。開発は、飢餓と貧困からの解放を意味する。開発とは、世界の天然資源や経済的物資の公正な配分と、我々のエネルギーを生と未来のために用いることを意味する。我々は宗教者として、地球上のすべての男、女、子供にそれぞれ少なくとも三トンの爆発物があるが、十分な食糧はないといった、そうした世界の本末転倒を黙って許すわけには行かない。我々は、……この本末転倒の順位を逆転させることを固く誓うものである。

アフリカとのかかわり

この会議の開かれた場所がアフリカというだけではない。アフリカと、アフリカの人々の関心が、我々の議論の枠組と輪郭を形作った。アフリカの伝統文化は強力な共同体の家族的精神と生き生きとした一体的生命観を保持している。アフリカ大陸には多くの諸宗教—キリスト教、イスラム教、ヒンズー教、ジャイナ教、シーク教、ユダヤ教、そして伝統的諸宗教—が現在存在している。ナイロビにある多くの宗教教団が我々を迎え、ケニアという複合社会で共存することの豊かさと課題とを我々に感じさせてくれた。

アフリカの人々はまた、この会議において我々が取り組んだ諸問題そのものをこれまで痛切に体験してきており、従ってこれらの諸問題をより明確に理解することを我々すべてに得させてくれた。南アフリカの人種隔離体制（アパルトヘイト）が人間の尊厳を侮蔑することに対して、我々は隔離と分離を非難し、すべての人種から成る共同体を追求すべきことを訴えてやまない。旱魃や飢饉の中で人間的充実を求める叫び、アフリカの諸政府にみられる軍国主義の発展、アフリカにおける武器貿易の増大、政治的不寛容の諸事例、東西の対抗関係がアフリカの政治に入り込んできたことなど、これらすべての問題に対処すべく、我々は、地球的不安定の動態や、地球大の政治的経済的諸構造がアフリカの新興国に及ぼす影響を、より広く理解することを求められている。

新たに発足したWCRPアフリカは、正義の社会の樹立に当たって宗教者が提供すべき共通の諸価値を明確に表明しようとしている。変革のための闘争に積極的に参加すべきことが強調され、新しいアフリカの実現献身するさまがここには示されている。

地域紛争の和解

WCRPが新たに取り組むべき主要な仕事としては、恒常化した地球の緊張や紛争の地帯——南アフリカ、中東、南アジア、東南アジア、中米、ヨーロッパなどにおける——を先ず取り上げるべきであろう。第二次世界大戦以降、150を越える戦争の大部分が第三世界において行われ、少なくとも一千万人の生命を奪った。地域紛争はたちまちにして東・西

の勢力によって分極化され、全世界にわたって不安と動揺のレベルを高める。

これらの紛争の根源は多種多様で、しかも複雑である。とはいえ、かかる紛争が、宗教的な言語や象徴を用いて相互に闘われるところでは、地域的に、そしてまた国際WCRPの指示をえて、これに関与することがWCRPの務めとならざるえない。

我々は宗教者として、和解と平和形成の業を果たすべく献身する。宗教的不和のあるところ、そこにおいて我々は問題と取り組まなければならない。偏狭な、あるいは排他的な目的のために宗教的言語が用いられる経済的・政治的闘争についても、我々はこれを取り上げなければならない。我々は平和に献身する宗教的機関として、宗教と平和とが対立するかに見えるまさにその地域で行動を起こさなければならない。

軍縮

軍縮はひさしくWCRPの仕事として優先されてきたが、軍縮のための働きの緊急性必要性は、今日いささかも減じてはいない。宗教的信仰は異なれども、我々は異口同音に、核兵器、および一切の大量無差別破壊兵器が道徳に反し、犯罪性を帯びること、さらに、それらの兵器を使用するという意図や威嚇をもって貯蔵することは、道徳的文明の基盤そのものを崩壊せしめるものであることを断乎主張する。

我々は軍備競争に対する反対において積極的な役割を担ってきた科学者、医者、教育者、政治家たちとともに手を携える。我々は国連の非政府機関として仕事を続け、我々の属する宗教教団や国家に影響を及ぼすべく働きかけながら、軍縮のために断乎献身することを誓う。とりわけ我々は、一切の核兵器廃絶に向けての不可欠な最初の措置として、これから先の核兵器の研究・生産・配備一切の即時的凍結、核拡散防止条約の強化、包括的核実験禁止条約、核保有国による先制使用否定の約束などを要求する。

通常兵器もまた死と抑圧の道具にほかならない。軍事化の蔓延を防止すること、さらに武器貿易によって軍事的政治的従属を招来し、発展途上国を商業的に搾取することを止めさせることもまた我々の軍縮に対する献身的努力の重要な一部をなす。

この会議に集った青年達は、平和省の設置を呼びあつけ、国防省のよくなしえなかった全地球的安全保障の実現に努力すべきことを求めたのは、未来に対する我々の希望のしるしである。

開発

アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの代表たちは、いわば貧者の眼を通して軍備競争を眺め、それによって、全く新しい視野を我々すべてに提供した。そもそも貧者にとって生き残りうるか否かは、第一義的に、核の世界における未来の問題ではなく、飢餓、旱魃、疾病にさいなまれる世界の現在の緊急問題である。平和に対する我々の共通の努力は、軍縮と開発との明確な相互関連性を踏まえた上でなされなければならない。

軍縮は解放を意味する。それはひとり、大量に蓄えられた使用寸前にある兵器からの解放を意味するのみならず、死の道具に取り憑かれていることから生ずる永続的恐怖と不安からの解放をも意味する。開発は、飢餓と貧困からの解放を意味する。開発とは、世界の天然資源や経済的物資の公正な配分と、我々のエネルギーを生と未来のために用いることを意味する。

我々は宗教者として、地球上のすべての男、女、子供にそれぞれ少なくとも三トンの爆発物があるが、十分な食糧はないといった、そうした世界の本末転倒を黙って許すわけには行かない。我々は、我々の属する宗教教団や国家の政府を通じ、さらにまたWCRPと国家との持続的協力を通じて、この本末転倒の順位を徹底的に逆転させることを固く誓うものである。

我々は、不正と貧困を永続させる経済的政治的構造が完全に変革され、かかる不正と抑圧の構造を維持するに必要な軍備が、平和な仕事のための鋤に変えられるような世界を望んでやまない。

人権

軍縮、開発と並んで、人権は我々の追い求める全体的総合的平和の不可欠の部分なす。人権とはひとり市民的政治的権利を言うのみならず、生存権、ならびにあらゆる基本的な経済的社会的文化的諸権利を意味し、宗教的自由をも含めて、自由にして充

実した人生に必要なものである。我々は国連の世界人権宣言を全幅的に支持することを再確認し、これらの権利が、正義と人道を具現する社会のまさに基礎であり土台であること、そしてそれらは、国家の安全保障の名目であとまわしにされたり、停止されることが決してあってはならないこと、を主張する。

人権に対する我々の支持は一貫したものでなくてはならない。人権が蹂躪されるところ、それがどこであろうと我々は発言し行動しなければならない。自分たちの政治目的にあわせて、ある場合には声を上げ、別の場合には人権侵害を無視するような国々、とりわけアメリカとソ連などが、人権問題を選択的戦術的に利用することに対して我々は抵抗し、それを暴露しなければならない。

ヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒など、南アフリカからの代表たちは、いずれも我々に、アパルトヘイトという人権優越主義のイデオロギーと「神学」によって、個人、家族、全民衆に加えられた苦しみとはかりしれない暴力を痛切に分からせてくれた。南アフリカの政権を支援する国際的な政治・経済構造を変革するために働くことを我々は誓う。人権に対する配慮から、我々はまた人間の尊厳をないがしろにする他の多く場合についても地域的国際的に行動しなければならない。政治的指導者や宗教人による努力にも関わらず、根深い偏見が存在して色々な形の差別を生みだし、インド亜大陸および南アジアにおいては、未解放カーストや経済的圧迫と社会的蔑視に悩む諸階級が、日本においては部落民が、さらにアメリカ大陸、オーストラリア、フィリピンその他諸々のところにおいては原住民などが差別されている。世界には幾百万もの難民がおり、故郷に定住する権利を奪われているが、アフリカだけでも四百万の難民を数える。さらにまた、閉ざされた扉のかげで、人権を剥奪されている無数の人間がいる。消されてしまったか、裁判抜きで投獄されたか、拷問の犠牲となったか、である。どこでどのようなかたちにせよ人権侵害の生ずるところ、それは、国際的にも、宗教的においても我々の関心事とならざるをえない。

我々は、確信と希望をもって1981年の「宗教又は信条に基づく不寛容と差別に関する国際宣言」を支持し、その実施を支援することを誓う。

平和教育

平和のための教育は、今までにもまして緊急事となっている。宗教者として我々は、それぞれの宗教の寺院や教会、および家庭における教育を通して、我々自身の宗教的伝統の中にある平和形成の基盤を力説し、これを人々に自覚させることを誓うものである。そのためには平和教育のプログラムに関する計画、訓練、拠金等に精魂を傾ける必要がある。行動的宗教者として我々は鋭意、各自の個人的生活や日常的選択を、平和を創り出すものとしての我々より広汎な働きに関連づけなければならない。

我々の宗教組織や諸学校、諸大学において、平和教育のための新たな試みが率先なされることを我々は推奨するものである。公生活や地域社会の生活においても、軍備競争の現実、戦争に立ち至るような紛争、非暴力的紛争解決のための手段・戦略、国連やユネスコ（国連教育科学文化機構）の働きなどについての知識や議論を盛り込まなくてはならない。

平和教育にとって大切なことは、我々と地域社会、国家、世界をともにしている異なった宗教、イデオロギー、文化をもつ人々のことを学び、そして理解するようになることである。多くの場合、紛争や暴力の反対は知識であり、これによって恐怖は信頼に道を譲るにいたる。我々は対話を絶やさず、また共同作業をともに行うことによって、相互理解を強め、また深めなければならない。我々はお互いを理解する必要がある。我々は自分自身をより明確に認識し理解するためにお互いを必要としている。さらにまた我々は、世界中の人々との資源とエネルギーを必要にするような仕事をともに行うべくお互いを必要としている。

我々の属する諸宗教の霊的資源が、我々の前にある責務に献身する力を与える。我々は、我々を生かしている信仰と希望を、人間の尊厳と世界平和のための躍動する行動へと転化することを命ぜられている。

Religions for Peace 